ブータンミュージアム通信 vol. 21

目次

1　しあわせ「おしゃりん」　岩佐 代市・・・・・・・・1

2　ブータンミュージアム、福井市から勝山市へ移転
　霊峰白山を仰ぎ、新たな幸せ求めて　栗原 哲朗・・・・・・・・8

3　健やかな子供の成長のために
　「面会交流支援センター福井」　中川 陽子・・・・・・・ 13

4　ブータン一口メモ
　ブータンの手漉き紙と日本の技術協力　白澤 典子・・・・・・・ 16

5　アジアの村を歩く 19 祈りの島 スリランカ　松田 宗一・・・・・・・ 18

6　編集後記　奥村 彰二・・・・・・・ 20

2013 年 9 月ブータミュージアムが企画し、福井県で行われたブータン政府地方行政官のための JICA 青年研修の参加者のひとり Pema Tenzin さんの近影（チョモラリ・トレッキングコースにて 2020 年 11 月）

しあわせ「おしゃりん」

岩佐代市

いわさ よいち・経済学博士・関西大学名誉教授・ＣＦＰ®認定者

ＪＲ北陸本線の福井駅から南へ二つ目に、大土呂（おおどろ）という名の駅がある。そこから東へ自転車でおよそ十五分、かつての個性派俳優たる宇野重吉氏の生地があり、その次の村に私は生を受け、十八歳までそこに育った。したがって、周りは田園のみ。・・・と言えば、ハイカラにも聞こえようか（ハイカラというのは、今やナウい表現とは言えない。ナウいというのも、古すぎる。タイトルに共振させて「おしゃれ」とするのがベストか？）。その実、田んぼと畑ばかりの村にすぎない。しかし、やがてそれは福井市に編入され、町を構成する一部となり、悪くても郊外という位置づけに「昇格」したのだ。

さて、大土呂、その駅前には往時、ソロバン塾があり、乗り気しないままに通った覚えがあるが（今の世であれば、パソコン・タブレット教室やプログラミング教室、あるいはAI ロボット実験工房なんてものになっていたかもしれない）、この駅から国鉄「鈍行」を利用するというのは、市内の高校に通ったり、爺さんに連れられ寺参りしたりするルートの一つであった。その大土呂から少し西南の杉津にいたる途上には、有名な増永眼鏡の本社・工場がある。今や、そのメガネフレームの世界市場シェアは群を抜いており、他の追随を許さない。この会社を立ち上げた人の名が増永五左衛門（奇しくも、私の爺さんへと代々継がれてきた名前と同じだ・・・）。彼は、都会に出ていた彼の弟の提案を受けたこともあり、福井の主要産業の一つであった繊維関連事業から転じてメガネ枠造りの会社を創業した。当該社はその後大きく発展し、世界に名をとどろかせる、福井の誇るべき秀逸の会社となったのである。創業段階から軌道に乗るまでの事業展開に

おける悪戦苦闘、四苦八苦を物語った作品に「おしょりん」(藤岡陽子著、ポプラ社、二〇一六年)というのがある。

「おしょりん」とは、夜間の放射冷却によって積雪表面が氷結し、雪野原の上を自由に歩けるようになった状態を指している。私は、その名の由来やその名がどの程度広域に使われてきているのか、否か、今もって知らない。由来については、一つの仮説を持ってはいる。「照臨」(しょうりん)がその名の元になっているのではあるまいかと考えている。それは神が地上を照らした、あるいは神が地上に降臨した証しとも言え、輝かしい希望をもたらすことを含意しているのではないかと。事実、この「おしょりん」ができた朝は、当然のことながら快晴である場合が普通で、陽光が雪の結晶にきらきらと反射し、まるで水晶かダイヤのごとく、実にまばゆいばかりの輝きを視界へと届ける。一日を通して冷気が続くと、この「おしょりん」は昼過ぎまで維持されることがある。その呼び名は地域によって多少異なるようで、私の生地にては「おしゃりん」と呼ばれていたものと記憶する。そこで、当エッセイのタイトルと同様に、以下では、「おしゃりん」と呼ぶことにする。

「おしゃりん」は、私を含めて当時の子供たちには実に愉快かつ楽しい気分を与えてくれた。小学校への通学には、多くの場合、区画された田んぼを右や左に眺めつつL字型に道路を歩むしかない。ところが、「おしゃりん」の日は家からほぼ直線的に、つまりI字型に学校へ向かうことができる。昼過ぎまで「おしゃりん」が維持されている場合には、帰り道も同様だ。もちろん、気分次第でいわばm字型にあちこち寄り道しながら、さらに望むならO型ないしα型の文字を描きつつ、「おしゃりん」をひたすら楽しみつつ、あくまでも自由気ままに多用なルートを取ることも可能なのだ。この行動の自由さと、広がる田んぼのど真ん中から眺める山並みの景色、それは普段のL字型通学ルートからのいつものそれとは趣を大いに異にしており、これらは刺激の少ない田舎町での子供たちに非日常的な喜びを多く与えてくれたもののひとつあることは確かだ。その気分は、しかし、子供のみならず、大人にとっても共通のものではなかったろうかと、今、

「暁更」リビングの窓辺からの蝦夷富士、やがて朝焼けの赤富士へ

遠き過去の記憶を追いながら思う。何か、とてもしあわせなひとときだったなあ、と。大仰に構えなくても、しあわせに思う気分は身近なところに少なからず見いだされるのだ。

なお、前掲小説のタイトル「おしょりん」は、雪に閉ざされた田舎にあっても、創意と工夫と努力次第で、日本や世界の中心とも直接的な（そう、I字型の！）つながりを持ち得るのだという思いや事業展開の広大無辺さを、象徴的に指し示そうとしたものだと理解できる。

ところが、その後は自然的要因の転変により、「おしゃりん」を体験できる機会はほとんど失われてしまったのではなかろうかと残念に思う。たしかに、私の幼少時代は、毎冬、大雪に閉ざされるのが常であったし、屋根の雪下ろしも日常的な義務の一つであった。唱歌「お正月」に「お正月には凧揚げて、駒を廻して・・・」とあるが、子供なりに「あり得ない」との違和感を覚えていたものだ。また、局所暖房用のこたつやあんかだけでは、ひと冬に一再ならず風邪を引かないですますことは不可能だった。しかし、時は変わり、福井の

正月でも雪が無いのは当たり前になりつつある。凧だって揚げられるし、庭先で駒を廻すこともできる。が、どこか寂しい思いもある。そのことも手伝って、かつてと今では、どちらがしあわせなのだろうかと、ふと考えてしまう。

雪を見る機会が顕著に少なくなって寂しいとの思い、それが私を北海道にいざなったとも言える。雪は、なかんずく美しい雪景色は、今や私に無くてはならない存在になっている。定年で退職し、その後の非常勤講師も辞め、十八歳より長年住まってきた神戸や丹波の地を離れて、今、北海道はニセコの地に居を移している。地球温暖化の将来を見越して（私には、実に先見の目があったのだ！）、またマルチハビテーション（多拠点居住というスタイル）の考えに共鳴もして、もう十五年以上も前に家を建てていたので、生活拠点の移動は私にとって決して難しいものでは無かった。ただ、ニセコ周辺で「おしゃりん」をまだ経験はしていない。パウダースノーだけに、表面が氷結しても、雪下は必ずしも堅くないということに原因があるのかもしれない。他方で、「おしゃりん」の究極の姿として、大きな湖が凍結するという現象がある。北海道では支笏湖を除いて多くの湖が冬の間、水面を厚く凍結させて、広い氷原を生み出す。わかさぎ釣りの愛好家が多いのもむべなるかな。ところが、近年は温暖化が北海道にも押し寄せてきている。数年前から八月初旬に梅雨っぽさを感じてはいたが（気象庁に問い合わせると、北海道には梅雨が無いとの回答。梅雨っぽさはあっても、降雨量、続く期間、温度などから梅雨の定義には該当しないとの判断らしい。つまり、北海道に梅雨は無いということにしているだけなのだ）、最近は梅雨前線が函館を越え、渡島半島の中央部分まで平気でせり上がってきている。昨年は、なんと積丹半島の上までシフトしてきていたから、ニセコ周辺もその影響を避けられなかった。台風だって、北海道を情け容赦なく襲い始めている。二〇一九～二〇年冬シーズンは全国的に暖冬で、雪があって当然の雪国でも雪不足の故に、さまざまの問題が出始めている（スキー場開業の遅延、冬期スポーツ大会の中止、ワカサギ釣りが場合によっては危険なレジャーに変身などなど）。ニセコの積雪量も平年比半分である（二月の札幌雪ま

「僥倖」ゲレンデに蝦夷富士を独り占め、やがて笠雲に覆われる

つりは規模を縮小するとともに、ニセコ界隈産の雪まで活用せざるを得なくなっている）。あたかも春先の三寒四温のごとく、寒暖が交代しながら断続的にやってくるため、せっかくの降雪も積み上がらないという仕儀である。自然的要因の変化が、北海道に逃れた私にとってのささやかな幸福をも侵し始めつつあることは否定できない。それどころか、豪州の森林火災その他の天変地異を見るにつけても、今や地球規模での大きな災いが津波の如くに押し寄せ、人間のみならず生きとし生けるものの個々の幸福を飲み込んでしまうかのような不吉な予感さえ禁じ得ない。

　そういうことも加わってか、今、幸福論がさかんだ。多くの面で、世の中、壁に当たっていることは間違い無かろう。経済的豊かさの面においても、そのことが必ずしも幸福につながっていないことは、つとに明らかとなっている。ただし、豊かさの向上が足踏みしていることから不幸感を覚えている側面はあるかもしれない。今豊かでなくても、豊かになれそうだ、豊かになる将来見込みがあると思えさえすれば、必ずしもふしあわせではないのかもしれない。もしそうなら、

豊かさの水準が問題なのではなく、豊かさの伸び代への期待感が幸福を決定づける要因なのかもしれない（高度成長期は貧しくても豊かになる期待感に満ち、多くが活き活きしていた、と見なすことができよう。他方、八〇年代末のバブル崩壊以降は食うに困らず豊かでありながら、状況は長期停滞的であり、閉塞感から将来不安を感じている人々も少なくないように見える。ちなみに、「行動経済学」という新しい経済学の領域では、経済諸変数の水準そのものよりも、その変化に対して生き身の人間は強く反応する傾向があるとの前提で議論が展開されている）。年金生活に入った私には経済的豊かさが増すとの期待感は全く無いどころか、むしろ収縮するとの見込みさえが強く抱かれている。加えて、先にも触れた自然的諸要因（地球温暖化やこれとも関連すると思われる自然災害の頻発）、および社会的諸要因（日本社会の安定性・安全性の毀損化傾向と絶え間ない民族間不和や国家間の小競り合い）に将来不安や懸念を抱き、ふしあわせ感を覚えることは少なくない。しかし、ニセコ山中の静寂環境で、緑と雪に囲まれ、読書と音楽と雪遊びに耽溺できる当面の暮らしには、そうしたふしあわせ感を補って余りあるものがある。ニセコ周辺では外国人の増加に合わせたホテル建設ラッシュが騒々しくも今なお続いており、日本一の地価上昇率をもたらしている。が、本州と比べれば、まだまだ人や建物の密度は低く、不動産価格水準も低い。水準は低いが、上昇率は高い。「行動経済学」の観点からすれば、これは、地域におけるしあわせ感が、今のところ強いということになるかもしれない。三〇年度に予定の（目論まれている）札幌までの新幹線延長（倶知安駅増改築）と札幌オリンピック開催（一部の種目はニセコにて実施）までの期間限定ではなく、持続性あるしあわせ感醸成の仕組みや努力が望まれるのも間違いないところである。

最後に、冒頭にも記した増永五左衛門の経験したであろう四苦八苦に関連して、四苦八苦とは本来不幸の種として仏典に記されたものであるらしい。生老病死の四苦と、これに加えて愛別離苦（アイベツリク、親しきものとの別れ）、怨憎会苦（オンゾウエク、憎き

ものとの遭遇）、求不得苦（グフトクク、求めて叶わぬこと）、五蘊盛苦（ゴウンジョウク、身体精神に関わる諸機能とこれらへの避けがたいこだわり）の四苦とされる。この内、後者の四苦には概ね理解が及ぶものの、前の四苦の中の病苦を除けば、それらがいかなる意味で苦なのか、私には今のところ全く理解できないでいる。生まれた喜び、生きる喜び、老いて老境に入る喜び、天寿を全うして死ぬる喜びは考えられても、そこに苦は無い。そう、今の私には思える。この四苦八苦については、仏教徒の多いブータンの人々からも示唆を得たいものだと思う。が、さしあたり病や怪我に苦しむのさえ避けられるならば、また自然的要因と社会的要因をさえ別に考えれば（生きる限り、これらの要因から独立ではあり得ないし、「おしゃりん」やわかさぎ釣り、海外への自由渡航などの楽しみも制約を受けるのは避けられない。そうしたつつましい幸福感が持続的に得られるためにも、環境保全と社会の安全・平和の維持に貢献し得ることは当然になすべきことだと自覚しつつ・・・）、とりあえず、しあわせ感は維持できると楽観している、今日この頃である。

あとがき（自己紹介）

福井市徳光町出身、十八歳より主として神戸に暮らすが、定年を前に丹波市に移住し五年超の「いなか暮らし」に入る。職場の大学まで片道二時間半の電車通勤。二〇〇四年からは夏冬をニセコ山系麓にある倶知安町の山中に設けた別荘で過ごすこととしたので、北海道・兵庫県間の車による行き来は七〇回近くになる。この往還の旅では、いわゆる下道を走りつつ、日本列島の各所（温泉地、地方都市等）を訪ね、自分好みのロマンティッシェ・シュトラーセも発見する。二〇二〇年春、倶知安町に移住し今日に至る。同年晩秋、大学に寄る機会あり、やはり車で往復、各地にて紅葉狩りも楽しめた。今冬も雪に埋もれた生活となるが、降る雪、積もる雪の美しさは、まさに天からの贈り物。ともあれ、自由気ままな移動が可能となるには、そして何よりも世界が正常化するには、一刻も早いコロナ禍の終熄が求められる。

（二〇二〇年十二月一日稿）

ブータンミュージアム、福井市から勝山市へ移転

霊峰白山を仰ぎ、新たな幸せを求めて

栗原　哲朗

くりはら てつろう・認定ＮＰＯ法人「幸福の国」副理事長

福井市から二〇数キロ東にある人口約二万三千人の勝山市。同市に隣接する、「越前の小京都」とも言われる大野市とともに森林が多くを占める奥越地方を構成する。二〇一二年十一月に創設され、認定ＮＰＯ法人幸福の国が管理運営するブータンミュージアムは、福井市中心市街地からこの勝山市に今年七月に移転したのである。因みに、勝山市は二〇〇七年にアメリカの経済誌フォーブス電子版で、世界で九番目（もちろん日本、アジアでは一番）にクリーンな都市と評価されたことがあるほど、環境に優れた住みよい町である。

そもそも当館は新型コロナウイルスによる感染症拡大防止の為、三月五日から六月一杯休館していたのであるが、財政的な問題などもあって、この機会に勝山に移転したものである。今回移転したところは、遠くに霊峰白山（標高二七〇二メートル）を仰ぎ見て、眼前には鮎釣りなどでも有名な、福井県を代表する一級河川、九頭竜川が流れ、周囲は田園風景が広がるなど、正にブータンに似た自然豊かな土地柄である。近くには、世界有数の恐竜博物館があり、年間百万人近くの人が訪れている。また、日本一大きな越前大仏や勝山城博物館、苔寺として有名な平泉寺白山神社、スキージャム、道の駅「恐竜渓谷かつやま」、日本酒の蔵元、六呂師高原牧場、そして毎年二月末にある奇祭「勝山左義長」祭りなど、また、隣町の永平寺町には、あの有名な曹洞宗の総本山、永平寺があるなど、見所は数えきれない。大野市も魅力いっぱいだ。日本一美しい星空でも知られるところだ。また、小京都とも言われ、多くの寺院が立ち並ぶ界隈「寺町通り」もある。また、最近では天空の城で知られる大野城が有名だ。また、御清水（おしょうず）で知られる名水の産地としても有名だ。勝山市、大野市からなる奥越（奥越前の意）地方は、これから数年後には大いに注目されるだろうと思う。というのは、現在、中部縦貫自動車道

の整備が着々と進んでいるからだ。

中部縦貫自動車道というのは、長野県松本市から福井県福井市までを結ぶ高規格幹線道路である。岐阜県高山市の飛騨清見ジャンクションで東海北陸自動車道に接続、同道を経て白鳥ジャンクションで分岐し、大野、勝山、永平寺を経由して福井市に至る。現在、北陸自動車道（米原ジャンクション～新潟中央ジャンクション）福井北ICから大野ICまでは整備され、供用されている。大野ICから和泉ICまでは後二年、その先は岐阜県に向けて油坂出入口から白鳥ICまでは既につながっているが、和泉ICから油坂出入口まではまだ何年か先になるのだろう。だが、これが完成したら、奥越地方は信州、飛騨高山、中京方面から福井県への正に東の玄関口になるのだ。

ブータンミュージアムは、福井駅を始発駅とする、えちぜん鉄道勝山永平寺線の終点、勝山駅から二つ手前の発坂駅（ほっさかえき）から徒歩数分のところにある。中部縦貫自動車勝山ICからは車で二、三分のところにある。今回の移転先には、民家、土蔵、倉庫などがあり、そのうち土蔵（二階建て）をリニューアルして、ミュージアムとしたものである。階段は付けなおし、二階の床板も張り替えた。最初目にしたときの状態からは見違えるような姿に変貌した。そして、そ

2020年12月半ば、雪に見舞われたブータンミュージアム

の土蔵に隣接する小さな平屋の倉庫はミュージアムショップとして整備した。八月から九月までは、施設の整備方針や、ミュージアムを管理運営している認定ＮＰＯ法人幸福の国の今後の運営方針、活動方針などを検討した。そして、十月に入ってようやく展示作業に入り、十月二五日にようやく再オープンに漕ぎ着けた。

ところで、福井市にあったときから入館者によく尋ねられたのは、どうしてここにブータンミュージアムがあるのか、ということである。正直、私たちも多少返答に窮するのだが、このミュージアムの創設者であった方が、二〇一一年秋に来日した国王夫妻のスピーチや立ち居振る舞いに感銘をうけ、より多くの人々にブータンを紹介したいと思ったからである。

また、日本総合研究所による幸福度ランキングにおいて、たまたま福井県が幸福度No.1と評され、福井県がいろんな意味でブータンに似ていたことが背景にあったからだと思う。

では、福井県は一体、何がブータンと似ていると言えるのだろうか。思うに、ひとつには、蓮如上人の布教により真宗王国と言われる福井県には真宗門徒が多く、県民の信仰心が篤い点であろう。また、地場産業として織物や伝統工芸（漆器、竹細工、手漉き紙、木工芸、打ち刃物など）が盛んであること、霊峰白山を臨み、棚田の風景も県内かしこに見られる。また、県民性もおっとりとしていて、お互いに助け合い、自給自足的な田畑をしている人も多く、豊かな自然の中で穏やかに生活している。こじつけかもしれないが、このようにブータンと福井県の共通点は多いのではないかと思う。今回移転した勝山は、福井県の中でもブータンに似た土地柄のひとつではないかと思う。

今回、私たちは土蔵と隣接する倉庫を活用して、ブータンミュージアムとミュージアムショップを運営していきたいと思っている。また、これらの施設と同じ敷地内に母屋（民家）や工場として使われていた建物もあり、敷地全体の広さは約一〇〇〇平方メール以上ある。母屋一階では、白山ＬＴ㈱が音楽喫茶「ドゥルク・チェチェ」を経営する。名前の由来はブータンのことば、ゾンカ語で「龍のこどもたち」から来ている。参考までに補足させていただくと、白山ＬＴ㈱（ＬＴはローカル・トラストの意）は、県内の古民家などをリニューアルし、観光客などに一棟貸ししている会社である。特に都会に生活する人たちに、古民家で田舎の暮らしを体験することにより、豊かな時間を過ごしていただき、そして幸せな雰囲気を味わってほしい

という思いから活動している会社である。この音楽喫茶では、今後、各種演奏会、歌声広場なども企画する予定と聞いている。また、ブータンの家庭料理などの提供やブータンの料理教室なども考えている。また、広い敷地の空きスペースにはいろいろな花を植え、天気が良い時はオープンカフェ的な使い方もしたいと考えている。

一方の工場だった建物は、さらに別の会社である福井都市開発㈱がリサイクルショップ「エコフレンズ」を営業することになっている。物を安易に廃棄せず、できるだけ大切にリサイクルするための店である。つまり、この同じ敷地内にある施設は、認定ＮＰＯ法人「幸福の国」、白山ＬＴ㈱、福井都市開発㈱の三事業体が、ブータンミュージアムとミュージアムショップ、音楽喫茶「ドゥルク・チェチェ」、リサイクルショップ「エコフレンズ」をそれぞれ経営することになる。我々の共通のコンセプトは、それぞれの活動の中で、幸せな生き方を考え、模索し、実践するということであり、今後、お互いに連携できるところは連携して活動していきたいと考えている。

福井市内からこのブータンミュージアムに来るには、えちぜん鉄道「略して、えち鉄」が便利である。ところで、えちぜん鉄道は、京福電気鉄道がその前身だが、かつて二度の列車事故を契機に経営不振となり、営業を停止したため、県をはじめとする三セクで新たに設立された運営会社が事業を引き継ぎ、二〇〇三年から営業している地方鉄道路線だ。その後、その路線の多くの利用者からなるサポーターズクラブなどによる熱烈な支援や会社の独創的な経営努力により、これまで安定的に乗客が増えつつある模範的な地方鉄道であり、全国から視察に来る人も多いようだ。また、えちぜん鉄道として再出発した実話を元に、同社のアテンダント（車掌兼観光ガイド、あるいはコンセルジュみたいな存在）として働く女性の人間ドラマが描かれている鉄道映画「えちてつ物語　～わたし故郷に帰ってきました」が、二〇一八年秋に一般公開された。主演は映画初主演となる横澤夏子である。

ブータンミュージアムは、このえちぜん鉄道の勝山永平寺線（一時間に二本）で、終点勝山駅の二つ手前の発坂駅で降りて、九頭竜川沿いの道なりに徒歩数分のところにある。福井駅から発坂駅までは四五分から五〇分である。発坂駅に近づくころ、左の車窓に色彩豊かなルンタが空になびいているブータンミュージアムが目と鼻の先に見えてくる。当ミュージアムのすぐ横をこのえちぜん鉄道が走っているからだ。

余談だが、えちぜん鉄道は私の愛しているおすすめ

の乗り物だ。えちぜん鉄道は、海へ向かう三国芦原線と山へ向かう勝山永平寺線の二路線があり、ともに始発駅は福井駅である。その両沿線沿いには楽しい観光スポットがたくさんあるのだ。その多くの観光スポットを訪れるためのおすすめの方法は、土日祝日限定で発売される、えちぜん鉄道の一日フリー切符（一〇〇〇円）である。これで、二路線を一日自由に動き回れる。県内にはさらに私鉄の福井鉄道がある。これはJR福井駅前から越前市の方に伸びている電車だが、日本でも珍しく、二つの私鉄が相互乗り入れをしており、田原町駅で二路線は合流する。その私鉄二社の三路線の一日フリー切符も一〇〇〇円で発売されている。これを使って、一日、のんびり、ローカル電車に乗って県内嶺北地方を旅するのは、何とも優雅で幸せ感一杯になれる。是非、一度お試しいただきたい。

車でお越しの場合は、福井方面からは中部縦貫自動車道で勝山ICを出る。岐阜方面からは大野ICから同自動車道を走り勝山ICで降りる。同ICから当ミュージアムまでは車で一、二分である。入場料は無料（任意で運営協力金にご協力いただいている）。みなさん、日本でも珍しいこのブータンミュージアムに是非一度、お立ち寄りくだされ！

ブータンミュージアムのすぐ近くを走るえち鉄電車

健やかな子供の成長のために
「面会交流支援センター福井」の現状

中川　陽子
なかがわ　ようこ・認定ＮＰＯ法人「幸福の国」理事
・面会交流支援センター福井代表

面会交流支援センター福井の設立の趣意は次のページのイラストでお解り頂けると思いますが、当センターは今年八月で満五年を迎えました。現在までに二〇ケースの面会交流の支援をしてきました。その内二ケースだけが母子面会であり、殆どは父子面会です。（又、今年令和二年十月からは敦賀支部を開設し、敦賀と小浜二ケースの面会交流に携わっております）

父親、母親の強い相克のために、家庭裁判所の調停や審判でようやく面会交流が決まったとしても、実行することにたじろいでいる親子に対して、当センターは安価で安心な支援をすることを目的としています。

子供の成長による自立、父母間の融和、代替執行に移行したものなど、終了した四ケースを除いて現在一六ケースに携わっております。この中には障害（軽度～重度）をもつ子供のケースが四件あり、重い責任を担うことになっています。

いつの面会でも子供は明るくはしゃぎながら父親（母親）に会っています。本当に健気であると思いますし、父親は（母親には見せていなかったであろう）おおらかさと優しさで真剣に子どもに接しています。僅かな時間の中で見守っている私達も思わず涙ぐみそうになります。子どもがぐんぐん成長していくにつれて父親も母親も少しずつ成長していくのが分かります。短い時間を惜しみながら別れていく親子にはいつも幸あれと祈る思いです。

私達の仕事の第一は父、母、子どもとの日程等の調整役です。毎日のように電話や面談での調整が続いています。それぞれに対して正確に聞き取りを行い、担当者はその知見の下、関心を以て対応する必要があります。これはかなり大きな負担になることであり、

面会交流支援センター福井

『面会交流支援センター福井』は、
平成27年7月に設立された、親子のための
面会交流を支援する機関です。（弁護士、元調停委員、
元調査官、医師等で構成されています。）

健やかな子供の成長のために

①ご相談

ご相談は無料です。
相談内容の秘密は守られます。

②支援利用申込 委任契約

監護親、非監護親双方からの申込が必要です。
対象となる子の年齢は、15歳未満とします。

③支援計画作成

監護親、非監護親双方の自主的合意を尊重した綿密な支援計画を作成します。6ヶ月目に支援計画を見直します。

④支援開始

面会場所の提供、子の受け渡し、見守り、付添い等信頼のおける支援員がサポートします。

⑤自立面会

自主的な面会が可能になるまで支援します。
支援期間は原則1年間です。

当会は、キリン福祉財団のキリン・子育て応援事業助成金を受け活動しています。

お問合せは→→→→ センター直通　０９０－２１２５－０８５０（フクイニッコリ　オヤコマル）
事務局　福井市大手３－１５－１２　司法書士法人ｉｓｔ方
０７７６－２８－２５５５

事例に基づいた指針を作成する必要性を痛感しております。

現実の面会交流の場では、私達支援員はあくまで「見守り」に徹すべきだと思っています。若い父親、母親に対しては、どうしても指導的な言動が多くなってしまいます。提案という形に留めるべきであるとは思いますが、老婆心からのお節介がついつい出てしまうということもあって、支援者同士の研修を増やし指針を求めていくことが必要です。

今、私たちの支援している障害のある子供は、その障害が、その子の個性と思えるほどいい子供達で、子供にも、そのように育てている親御さんにも敬服している現状です。この子達のために安全で利便性のある面会の場所を求めたいし、子供達のサポートをしているカウンセラーとの協働も求めて行きたいものです。

今、やらなければならないことがいっぱいある時に、コロナ感染の拡大が起こり、福井市からの援助で使わせてもらっている児童館が閉鎖になり、面会は休止にしておりましたが、会員の運営する認定幼稚園を使用しての面会交流を徐々に進めております。また、子供たちと同居親、別居親の意向で支援センターを介してのメッセージの交換が行われています。親子の成長を感じています。

この五年間に、ブータンミュージアム（ＢＭ）の野坂御夫妻や事務方の皆様には優しいお心使いを多々頂きました。面会当事者の父親、母親、子供に対する細やかな心配り、子供の別居親への受渡し・引取り場所の提供、支援者である私達への協力の他、ＢＭの寄付金ボックスの横に当センターの寄付金ボックスも置いて頂き、時々はポケットマネーを入れて下さったりして、当センターの運営に多大のご協力を頂いてきております。また、野坂夫人は当センターの会員にもなって頂いております。この度のＢＭ勝山移転に伴いこのような御協力は期待できなくなりますが、これまでのご厚情に厚く御礼申し上げます。自然豊かな勝山の地でのＢＭのご活躍を祈念致しております。

子供はもとより、人々の「しあわせ」の形を求めてブータンの過去・現在・未来を見つめていくＢＭの姿勢は、私たちの面会交流支援センターの目指す「ところ」と通底するものがあると感じております。

《ブータンの一口メモ》

ブータンの手漉き紙と日本の技術協力

白澤　典子

しらさわ　のりこ・認定ＮＰＯ法人「幸福の国」元事務員

ブータンの紙（デショ）の原料は、ジンチョウゲ科のダフネと言う植物の樹皮（内皮）で、日本の和紙の原料となるミツマタやガンピの仲間です。紙は強靭で光沢があります。

かつてチベットとの交易で栄えたブータンは、古くから地方のほとんどの家庭で手漉き紙を生産し、税金として使用されていた時代がありました。チベット文化圏ではブータンの紙を古くから輸入しており、膨大な量のチベットの経典類のうち最もすぐれたものの多くは、ブータン紙に書写されているといわれています。

漉き方も二種類あり、「レーショ」は木綿の布（レー）を貼った木枠で漉き、そのまま天日で乾燥します。薄手で木版印刷に適しており、包装紙、便せん、封筒などの製品になります。ブータンでは上下関係や友人同士で贈り物をする習慣があり、丁寧に紙で包み贈るのが正式であり、手渡すときも必ず新しいデショにくるみ渡すのが礼儀となっています。

「ツァショ」は竹ひご（ツァ）で作った「すのこ」を木枠にのせ、それで紙を漉き、漉き上がった湿紙をぬれたまま一枚ずつ積み重ねて乾燥させます。上質な紙で筆記用に使用されてきました。墨がよくなじみ、強度もあると言われます。手漉き紙の需要の大半は、大量の紙を必要とするマニ車の経文用などの仏教伝統関係となります。

こうした手作業による製紙は、ブータンの農村地域の収入を生み出しながら、芸術を生かし続ける価値のある家内工業でしたが、現在は近代化に伴って家族で家業としてきた製紙は縮小し、紙漉き工房がティンプーをはじめ、各地に作られています。

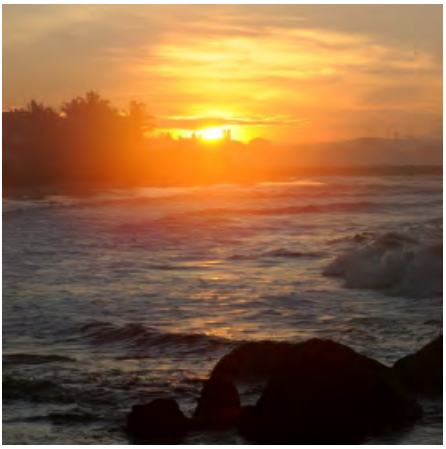
伝統的な紙漉き技法によって、世界市場で通用する産業にしたいというブータンに対し、日本からも協力

ブータンでの紙漉きの様子　　（ブータン航空機内誌参照）

を行っています。石州和紙で有名な島根県浜田市三隅町は、一九八九年ブータン政府の要請を受けて以降、ブータン王国と和紙を通じた交流を行っています。手漉き紙で産業化を目指すブータンに、機械の導入や品質向上などを支援してきました。また二〇一九年四月十二日にはタシヤンツェ（ブータンの最東端のゾンカク）において協同作業所が完成、「手漉き紙工房建設計画」の竣工式が行われました。協同作業所は日本政府の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」により建設され、日本との友好協力により更なる発展が期待されます。

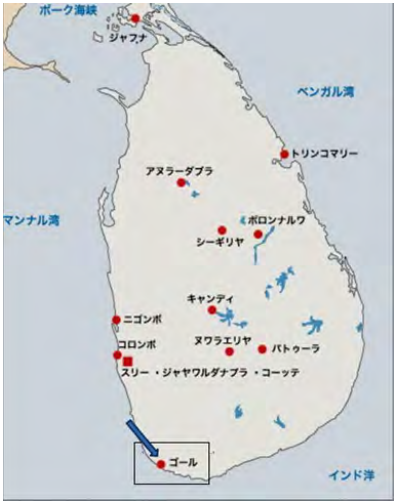
アジアの村を歩く

１９　祈りの島　スリランカ



岬の東方、朝日が眩しい

世界文化遺産に登録されたゴール旧市街地古くから貿易港として栄え、植民地時代の建築と南アジアの伝統が織りなす景観。人々の歴史を残す意識が災害からも街を守る



写真・文　松田宗一
（写真家・福井県大野市在住）

植民地時代の城壁が 2004 年のスマトラ島大地震からの大津波を防ぎ、世界遺産は守られた。

ホテルのプライベートビーチで日没までサッカーに興じる少年、小動物たちも身近にヨーロッパ人が築いた城塞都市にも自然が残る

インド洋に突き出た岬は、朝日と共に夕日も一望できる絶好のロケーション

編集後記　まず、この小冊子のための原稿を投稿して頂いた方々に私からお礼の気持ちを申し上げたい気持ちです。それと同時に、筆者が原稿を受取ってから、最終版に対する校正原稿を作成するまでに一ヵ月以上経過してしまったことをとても申し訳なく、深くお詫び申しあげます。

一年以上前からブータンミュージアムのホームページのウェブサーバに、いろいろ改善すべきところが気になっていて、これを更新しなければならないと思い、少しずつその準備をしてきました。今回のブータンミュージアム通信をまとめる作業を任されたとき、次のブータンミュージアム通信は、更新されたホームページ上で公開しなければならいと思いました。現在ウェブサーバの更新については、完成とは言えない状況ですが、一応のひとくぎりができましたので、急いで遅れていた「通信」の方の作業にとりかかりました。

さて、今年に入って、すべての国に猛威を振っている新型コロナウィルス感染の大流行は、それぞれの国の事情により違いはあるものの、人類のすべての活動に大きな影響を与えています。日本でも、福井県でも、そしてまたブータンミュージアムでも、例外ではありませんでした。ブータンミュージアムが福井市から勝山市へ移転したのは、コロナウィルスのせいであるとは言えませんが、そのきっかけを作ったことは間違いないでしょう。

新型コロナウィルスの感染対策を行う上で、これまでの生活観、仕事観、あるいは人生観などを見直さざるを得なくなった面があります。そのこと自体は、むしろすばらしいことでした。これらは、しばしば新しいテクノロジーに関連していることがあります。

企業・会社などでは、何と言っても、リモートまたはTVと頭に付けられた、ワーキングとかミーティングなど、教育の分野では、同じく、ラーニング、ミーティング、レクチャーなどが、よく話題になりました。これらはパソコンやインターネットの技術の発展とともに現れた技術ですが、これまではどちらかと言えば、一部の場面でしか、有効利用されていませんでした。また、そのための優れたソフトウェアが少なかったり、非常に高価なもので入手し難いものあったりしました。

コロナ対策が収まった後も、新たに開発された優れたソフトウェアを利用して、リモートと従来の対面的なものを併用することにより、非常に高い仕事効率、あるいは教育効果が得られる可能性があります。ブータンミュージアムも、これまで開発された高度なソフトウェアを用いて、コストを最小限に抑えながら、いろいろな意味で効率的に本来の博物館の役割を果たすことはできないものかと考えたりしております。

（ＮＰＯ法人「幸福の国」副理事長　奥村彰二）

[発行日]　　２０２０年１２月２０日

[発行元]

認定 NPO 法人 幸福の国

〒９１１－０４４８　勝山市鹿谷町保田８５－１８

TEL：０７７９－６４－５２７８

FAX：０７７９－６４－５２７９

ブータンミュージアム

ホームページ　http://bhutan-npo.asia/

E メール　info@bhutan-npo.asia

定休日　月曜日　年末年始

開館時間　11:00 ～ 17:00